

7. 2003 年 08 月号

あるテレビ番組での話だ。東北地方の小学校の職員室に落語家上りの人気タレントが突撃取材を敢行。集まった校長ら教員たちから、その年の卒業式で「仰げば尊し」という歌がうたわれなかったということを聞き出したタレント氏は、教員たちにあの歌をうたいたいかと尋ねる。すると、あれはいい歌だからぜひ唄いたい、ということにその場で衆議一決。しからば手始めにここでみんなで唄ってみようということになって、「仰げば尊し」大合唱と相成った。

ところで、この歌が卒業式から消えたのは、実は「教育基本法」の施行と関係があるのである。「三步下がって師の影を踏まず」という教師への絶対的服従は、同時に盲目にして無批判な国民を作り、こういう教育環境がファシズムを受容する素地であったと、GHQからみなされたのである。そして、教育基本法はその反省の上に立って作られたのであった。

少し長いが、その前文を引用しよう。「われらは、さきに、日本国憲法を確定し、民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意を示した。この理想の実現は、根本において教育の力にまつべきものである。われらは、個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならない。（以下略）」

この教育基本法、ただの一度も教育現場にその精神を採り入れられることも無く、早晩新法に取って代わられるようだ。その改定根拠は、青少年犯罪の凶悪化や不登校・学級崩壊などである。これらの悲劇は、一にかかって現行の教育基本法が愛国心をそこに書き留めておかなかったからだという。たしかに教育基本法は、明治近代以降の教育理念が、「国家統合」を最大の目標としていたのに対して、近代市民社会における「よき市民の育成」を理念とした。いまだに成熟した市民社会を創造できずにいるこの国の民には、日本国憲法と同様、荷が勝ちすぎたのかもしれない。

ノーテンキな顔つきで、人気TVタレントと肩を組みながら、「仰げば尊し」とうたっている老若男女の小学校教員たちの姿を見て、「蟹は甲羅に似せて穴を掘る」という格言がしみじみと思い出された。